

4. 顔の神経疾患

带状疱疹：水痘・带状疱疹ウイルスが末梢神経に感染し、その走行に沿った皮膚に水疱や湿疹ができて、神経痛を起こすものです。顔は前述の三叉神経の眼神経、上顎神経、下顎神経のいずれからの部分に帯状に出てきます。顔は常に外気にさらされるため、冬の冷気に触れると顔の神経痛が出るという後遺症が残る場合があります。治療はバラシクロビルなど抗ヘルペス剤で、神経痛が残ると**三叉神経痛**と呼ばれ、痛み止めなどを使います。

顔面神経マヒ：前述の顔の筋肉を動かす運動神経が機能しなくなることで、多くは脳梗塞など中枢神経に問題が起き、その結果、顔の片側の筋肉の動きが悪くなったり、力が入らず顔がたるんできます。なお、**ベル麻痺**、**ラムゼイハント症候群**と呼ばれる顔面



神経マヒもあり、前者は単純ヘルペスが関与し治りやすく、後者は水痘・带状疱疹ヘルペスが原因で難治性です。これらはヘルペスの治療に加え、マヒの治療としてステロイドなどが使われます。

まぶた、目尻のけいれん：まぶたの外側がピクピクと自分の意志に反して動いてしまう状態です。交感神経の緊張が高まるとおきやすく、過剰なストレス、睡眠不足などがある場合は誰にでもおき得ます。睡眠を十分とりストレスを解消すれば鎮まることがほとんどです。なお、“眼瞼けいれん”と呼ばれる自由にまぶたが開けなかつたり、瞬きが増えるという、開眼・閉眼のスイッチがこわれた状態もあります。こちらは脳に問題がある可能性があり、精密検査が必要です。

編集後記

今年も気づくともうゴールデンウィークです。1年の1/3が過ぎてしまいました。秋までは仕事もゆとりとできそうなので忙しい時期が来る前におこななければならないことをやっておくつもりです。今回はちょうど30年前に2年半滞在し研究生活を送ったカリフォルニアのサンディエゴを7年ぶりに訪れる予定です。お世話になった恩師も85才を過ぎ、ご夫婦ともにお元気であるとはいえ、いつ何時、何が起こるかわからない年齢なのでお目にかかっておこうと思立ちました。英語もおぼつかないまま渡米した当初、お宅に泊めていただき、明日は自動車免許をとりに行つてこいと英語の教本を渡されました。疲れと眠気と戦いながら、翌朝の試験場でも直前まで教本を読み、全部読み終わらないまま試験を受けました。たしか50題中で45題以上の正答率でなければ合格にはならなかったはずですが。当時はおおらかだったのか、1~2題足りなかったのに、「日本で免許を持っているのだからおおめに見よう。もう一度教本を読んでおいでね。」と試験官が通してくれ、よい思い出になりました。最終的には研究者にならず、臨床医に私はなりましたが、彼も退官後10年以上に渡って、ベルリンの壁崩壊後の東欧やケニアで医者や医療教育者としてボランティア活動をされ、臨床医としてもとても尊敬しています。しばらくぶりなので話すことは山盛りですが、上手に伝えることができるかが現在の懸念材料です。



山口内科

(GW休みのお知らせ)

4/ 27 28 29 30 5/1 2 3 4 5 6 7

通常どおり ← 休み → 通常

4月は27日(土)までの診療となります。連休の後の診療は5月7日(火)から始まります。

〒247-0056
鎌倉市大船3-2-11
大船メディカルビル201
(JR駅徒歩5分、大船行政センター前)

電話 0467-47-1312

<http://www.yamaguchi-naika.com>

すこやか生活

第20巻第11号
発行日平成31年4月25日
編集：山口 泰



目次:	ページ
顔の作りを知る	1
顔の皮フを見る	2
代表的な顔の炎症	3
顔の皮フの特徴	3
顔の神経疾患	4
編集後記	4



1. 顔の作りを知る

様子を伺うことを、「顔色を見る」と言いますが、人の顔をよく見ることはわれわれ医師の仕事の基本中の基本です。まずは、顔の基本的な作り(解剖)を確認しておきましょう。頭の内側から順番に見ていきます。

脳：耳より上の部分が概ね脳です。

頭蓋骨：様々な骨が寄り集まってできており、脳や目・鼻などの神経や感覚器を守り、食べ物を取り込んで咀嚼するアゴや歯などを含んでいます。

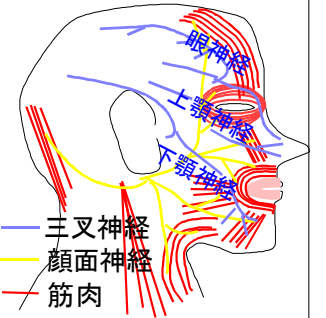
筋肉：頭蓋骨の周りは、ロースの薄切りのような筋肉が骨にまとわりついています。これらは、額に皺を寄せたり、微笑んでほほが弛んだり、えくぼを作ったりと表情を作るのに役立つだけでなく、まぶたを開いたり、食べ物を噛むなど、手足の筋肉のような運動を司っています。また、頭蓋骨には首や肩と頭蓋骨をつなぐ大きな筋肉が来ており、頭を動かしたり支える働きをしています。

神経：
顔面神経(黄色の線)：顔の筋肉の運動神経で、表情筋を動かします。この神経がマ

ヒすると口角が垂れ、食べ物が口からこぼれたり、ほほの筋肉に力が入らないなどいわゆる顔面神経マヒの症状が出ます。図のように耳の下前あたりから頭蓋骨の外に末梢神経として出てきて耳下腺の下をくぐり、その後枝分かれします。(一部味覚などの感覚神経が含まれます。)

三叉神経(青の線)：顔面の感覚神経で暑い寒い、痛い痒いなどの顔表面の感覚を感じています。こちらは、上から眼神経、上顎神経、下顎神経に枝分かれして、頭蓋骨から顔に出てきます。これらがマヒすると、温度や痛みを感じなくなります。また带状疱疹で顔が痛むのはこの神経が過敏になるからです。

皮フ：他の部分より薄く、神経の分布が多くとても敏感で、暑さ寒さ痛みを感じやすく、様々な刺激に弱くできています。



2. 顔の皮フを見る

前述のように、顔の皮フはとても薄くできています。このため、角化層のある表皮の裏側の真皮や皮下組織の状態が良くわかります。

顔が青白い（貧血）

血液中の赤血球に含まれる酸素を運ぶタンパク質であるヘモグロビン量が少ない状態で、出血量が多い場合などに見られます。顔の皮フの色が全体的に青白く、まぶたを裏返すと結膜の血管の赤味が淡いのがわかります。

赤ら顔である

多血症：貧血と逆で、血液が多い状態です。全体に顔が赤ら顔になることが多く、肺の病気などで酸素が不足し、それを補う場合に血液量が増えて起こったり、肥満が原因で睡眠時無呼吸に陥っている場合などに見られます。

毛細血管の拡張：部分的な赤ら顔の原因として多いものです。飲酒量が多い方などに多く見られ、よく見ると細いスジ状の血管が寄り集まっていたり、クモ状血管種と呼ばれる放射状に毛細血管がクモの足を伸ばしたような形態をしています。アルコールでなくとも肝硬変などで、解毒力が落ち、女性ホルモンの分解が不十分な時にも時々見られ、顔以外にも首筋や、全胸部、手掌の皮フにも同様な赤い変化が起こっています。

紫色の皮フ：血管から外へ出た血液が少し時間が経つと紫色に変色します。紫斑とも言われ、内出血を意味します。出血は直後が赤く、そのあと黒→紫と変わり、最後は黄色になって消えていきます。

黄疸：黄色いビリルビン色素が皮下に沈着し皮フが黄色く見えることです。赤血球の老廃物によるこの色素は、肝臓病、溶血性貧血などで色素が増えたり、ビリルビン色素の解毒などの処理ができないときに起こります。

顔がむくんでいる：浮腫といわれ皮フの下層に水が溜まっている状態です。腎臓病や心不全などで、体が水をコントロールできなくなった時に起こります。重症な病気が隠れている場合も多く、顔がむくんでいる場合は要注意です。

顔全体が大きくはれている：ステロイドの長期服用などで起こるムーンフェイスが代表です。原疾患の改善によって、ステロイドの減量や中止がかなえば、自然と解消してきます。

蝶型紅斑：両ほほが、手のひらくらいの範囲、赤や赤紫に染まりほんの少し隆起したようになる状態です。膠原病の代表的疾患のSLEの典型症状の一つとして出現します。最初小さな紅斑がツブツブとでて、徐々に癒合してきます。ほほは、日光過敏でも赤くなるので紛らわしいですが、関節痛や全身の倦怠感その他の症状がある場合は、抗核抗体などの精密検査で確認が必要です。比較的若い女性を中心に女性に多い疾患です。

ヘリオトロープ疹：上まぶたに、腫れぼったい赤紫の紅斑がでるものです。膠原病の皮フ筋炎に見られるものです。鼻や額、ほほまで広がることもあります。手の甲側の指の関節のにもゴットロン兆候といわれる紅斑がみられます。

仮面様顔貌：顔の皮下の筋肉が硬直し、表情の微妙な変化を作りにくくなって、まばたきが減り、表情が固まったような感じになることです。**パーキンソン病**でよく見られます。

強皮症：全身の皮フが硬く、ぶ厚くなり、その一環として、顔の皮フも徐々に硬く表情が乏しく固まったような感じになります。進むと口やアゴの動きまで制限され口が小さく、開口しにくくなります。

3. 顔の代表的な炎症

1) 丹毒

表皮の下の真皮という柔らかい部分に連鎖球菌の感染しておこる炎症で、赤くボワッとはれて、痛みや熱を伴います。真皮は静脈やリンパ組織が豊富でその流れがうっ滞すると起こりやすいと考えられています。はれは、**連鎖球菌**の毒素や菌に対する**アレルギー**が関与しています。発症は急で、突然顔の一部が真っ赤にはれて熱や痛みを伴います。**炎症の境界は明らか**で、首などのリンパ節もはれ、高齢者では意識障害をきたすことがあります。

内服の抗生物質では治りにくいこともあり、セフェム系の抗生物質を注射することが多く、ぶり返しやすいこともあり、10日から2週間近く治療しなければなりません。

2) 面疔

主に**ブドウ球菌**の感染によって顔にできる化膿性の炎症で、毛穴から入った細菌が毛のうに局限するニキビから皮下組織に炎症が広がっておこります。抗生物質が無いころは、そのまま髄膜炎や敗血症まで発展し亡くなることあったので恐れられていました。丹毒と比べ深いので**境界が不明瞭**です。治療は丹毒と同様に抗生物質をしっかり使わなくてはなりません。

顔の皮フの特徴

俗に“面の皮が厚い”などと、言うことがありますが、顔面の皮フは体の他の部分と比べて薄くできています。特に薄いのはまぶたの上で、手の平の半分の厚さです。これは、まぶたの開閉に邪魔にならないためや、表情を作るために動きやすくなっているためと考えられます。また、顔は衣服に覆われておらず、外気と直接接するため、温度や湿度、痛みなどを感じると神経が豊富で、感覚器としても重要な部分でもあり、神経末端と皮膚表面の距離が短くなっています。皮フは、内側を守る**表皮**、神経や血管、分泌腺が分布する**真皮**、そして脂肪や太い血管などがある**皮下組織**に

3) ニキビ

毛穴の根元にある皮脂腺にアクネ菌という細菌が繁殖し、炎症が起きたものです。皮脂腺という袋に脂が溜まって起こるため、小さな化膿巣のように見えます。性ホルモンのバランスが崩れて皮脂が溜まるので、男性ホルモンが急に増える思春期の男性や女性ホルモンと同時に男性ホルモンが増える思春期の女性にもよく見られます。年齢が進むと軽快・消失することがほとんどで、強い炎症によって痕が残らないように、洗顔などのスキンケアが大切です。

4) カミソリ負け

2枚刃などのひげそりで、剃るときに顔の皮フを傷つけ、そこに炎症を起こしたものです。傷をつけた場所にブドウ球菌などが感染し膿んでいる場合もあります。カミソリが切れなくなっているのに使い続けたり、使用後洗わず刃が汚染されていると化膿の危険が高まります。アフターシェーブローションはアルコールなので、剃った後に塗っておくと消毒効果があります。

5) アトピー性皮膚炎

アレルギーで起こる全身性の皮フの炎症で、かゆみが強く肘の内側など柔らかいところにできます。顔にできる場合もあり、全身を含めたスキンケアが必要です。

分かれています。このうちの主に表皮が薄いのが特徴で、他の部分と比べて弱くできています。このため、他の皮フと比べてより一層スキンケアに気をつけなければなりません。乾燥しがちなので、冬場はクリームや保湿剤が欠かせず、温度変化をもろに受けて真っ白になったり、赤ら顔になるため、顔を覆ったり冷やしたりすることも必要になります。また、化学物質の影響を受けやすいため、外用薬にも注意が必要で、ステロイドの軟膏もリンデロンなどの強めのものは控え、ロコイドのような弱めのものを使います。